

私の終戦記

静岡県 明石辰雄

一 終戦

終戦の年、私は十七歳、旅順医専一年生であった。家族は父、姉と姪、次姉、私、妹、弟の七人で、物は何でも不足しているときではあったが、至極平和な一家であった。

この年、四月、五月と飛行場造りの動員があったが、動員が終わって久しぶりに本を読むことができる日を迎えた私は、乾いた土に水が染み込むような充実感を感じながら勉学に励んでいた。

ソ連兵がソ満国境を突破して満州に雪崩れ込み、戦がにわか身近なものになったのが八月六日と記憶している。内地では六日に広島、次いで九日には長崎に新型爆弾が投下され、大きな被害を受けたことも知らされた。ソ連兵の進攻、新型

爆弾の投下が続き、机に向かつて勉強する私の心にも不吉な予感があつて動揺した。

そして運命の日はやつてきたのである。八月十四日、学校から「明朝五時、諸君はソ連兵を迎え撃つために北に向かつてもらう。教練用の武器、装備を渡すから、それを装着してうちに帰り、明朝所定の時刻に学校に集合するように」という命令が下つた。

いよいよ私たちの出番がきたと思つた。沖繩で戦っている同胞のことを思い、これも当然のことと受け止めたように思う。この日は忙しかつた。母代わりの姉は、衣類のほか必要と思われる持ち物を準備してくれた。私はこれが最後の家族との夜だと思い、あれこれ後のことを依頼した。そして書籍、学用品、思い出の写真などを整理した。整理が何とか終わったのはもう真夜中であつた。

翌八月十五日早朝、まず仏壇の母の位牌に香を手向け、今までの成長を守ってくれたことを謝し、家族にも礼を述べて別れを告げた後、姉が

作ってくれた握り飯を背囊はいのうの中に入れて家を出た。

所定の五時、校庭に集合した私たちに告げられたのは「本日正午、天皇陛下自らの玉音放送が行われることになっている。それぞれ家で放送を聞いた後、再び学校に集合するように。出陣はそのあとにする」ということであった。すぐにも出陣と思っていた私たちは、どういう放送であろうかなどと思いつながら一瞬緊張が解け、三々五々それぞれの家に向かって散っていった。

ラジオ放送は雑音が入って大変不明瞭で、放送内容が何であったのか理解できないまま学校に向かった。

私は教室に入つて戸惑った。うつむいて頭を抱えている者、涙をぬぐっている者がほとんどであった。私の所へ寄つて来た友人が、「日本が負けたんだつてよ」と言った。先ほど聞いて判然としなかった放送の意味がこのとき分かった。途端に私は息苦しくなつて座り込んでしまった。

武装を解いた私たちは校庭に整列した。校長は敗戦という事実を見つめ、私たちの今後の生き方について繰り返し話された。「どんなに苦しいことがあつても堪えて、日本に帰り、日本再建のために尽くす一員になつてほしい。そうしなければならぬ」という趣旨であった。悲痛な叫びに聞こえた。

校長の手で、台上に飾つてあつた校旗に火が着けられた。校旗はめらめらと炎を上げてすぐに燃え尽きた。学校の終わりというのはこんなにも悲しいものかと思つた。みんな手放して泣きながら、校旗の灰を分けてもらいに走り寄つた。

式が終わつてから寄宿舎に住んでいた学生は親元に帰り、私のように学校の近くに住んでいた者は付属病院の警護に当たつた。

夜、病院の出入り口はすべて施錠し、木刀を持って油断なく警備監視していたが、中国人街の方で地を揺るがすような音が響いてきた。叫ぶ声、物を叩きつぶすような音が続き、身がこわば

るような思いがした。看護婦寮の警備に就いていたS君が、頭に傷を負い、血だらけになって飛び込んできた。上級生が早速治療に当たり、大事には至らずに済んだ。病院の警備はこの後もずっと続いた。

二 ソ連兵の侵入

終戦後一週間ほどしてソ連兵が街に入ってきた。私たちは家の入り口や窓に板を打ち付け、窓にはカーテンを引いた。しかしソ連兵は威嚇のためであろう、銃を撃ちながら道路をのし歩いていた。家の中に銃弾が飛び込んできたという話をあとで聞いた。私たちは家の中で身を寄せ合って、ただ震えているばかりであった。

二、三日後、私は怖いもの見たさでそつと家を抜け出して、街角の家の陰からソ連兵の様子をうかがってみた。彼らは大体がひげ面の巨漢で、油染みた、所々かぎ裂きになったままのひどい服を着て、マンドリンと呼ばれる自動小銃を肩からぶら下げて、のっしのっしと歩いていた。

ソ連兵の暴行は日増しにひどくなった。家の扉を銃床で破って侵入し、略奪や婦女暴行があらこちらで起こった。避難場所として旅順市長宅や、病院があてられたが、逃げ切れない場合が多かった。

ある日、私の家も襲われた。私はソ連兵が入ろうとしている入り口に出て行って、ここにはだれも住んでいないと身振り手振りでやり合って、時間稼ぎをしている間に姉妹を裏口から避難所へ逃がした。二人は無事逃げ延びたが、妹は裏口においてあった醬油瓶を蹴飛ばし、足を切って血を流しながらの脱出であった。

このころ、男装するために髪を切って頭を丸めた女性がいたが、剃ったばかりで青白い頭ではかえって怪しまれるといつて、日に当てる焼いたというのも笑えない話であった。

ある病院では、入院していた娘さんが暴行を受け死亡するという事件が起こった。男たちが警備していたが、とき、所構わず発砲するソ連兵には

だれ一人手も足も出せなかった。この悔しさは今も決して忘れない。

三 旅順脱出

十月の初めのことである。旅順からの立ち退き命令を受けた私たちは、朝まだ暗いうちに起きてすぐ荷物を運び出した。三カ月分の食糧、衣服、寝具など必要な最小限の物だけであった。

やがて契約してあった二台の馬車が到着したので、しっかり荷台に積み上げた。渡満して以来築いてきた財産の大半を捨てて行かなければならぬのだ。私の勉強机の上の電気スタンドが倒れたままになっている。タンスも書棚も鏡台も捨てられたまま、やがて中国人の手に渡ってしまうのだ。父は「内地に帰ったら挽回できる」そう言いながらも顔色は普段とは変わっていた。

ゴトンと、積み上げた荷物がひと揺れして馬車は動き出した。苦難の道への第一歩であった。

街を通り過ぎ、三十分ほどして郊外の白銀山のトンネルに差し掛かった。トンネルを抜けると旅

順の街とは別れることになる。

振り返ると旅順市内が目の下に広がる。ソ連兵の侵入と中国人の暴動で荒廃してしまったが、私にとっては数々の思い出が詰まっている街である。新市街へ通じる一本のアスファルト道がある。この道は学舎へも通じていた。そして春はアカシヤの花房が潮風に揺れ、夏はアスファルトが太陽に焼けて暑さを照り返し、冬は吹雪が吹き抜ける道であった。トンネルに入る手前の台地からは、戦時中軍歌とラッパの音が絶えなかった第四一五部隊、白玉山にそびえる忠霊塔、商店街の屋根がよく見える。

私は六歳から十七歳の今日まで、十一年間の地で育てられた。特に心に深く残っているのは、母を失った悲しい思い出である。歩を進めるごとに悲しい思い出の街は遠ざかって行く。私は思わず目を覆った。覆った手のひらに涙がしみた。お別れだ。胸の中がかきむしられるようなひとときだった。

先へ進もうと前を見ると、旅大道路が坦々と続いてきた。アカシヤ並木ももう色付き始め、時折の風に舞っては私たちに降りかかってくる。私たちは行き先が大連ということが決まっているだけで、明日の生活がどうなるのか全く分からないのだ。父がどうにかするだろうとは思いますが、不安は募るばかりであった。そのうち、私の不安はさらにひどくなった。

大連に向かう行列の中にはいるが、父の車がずっと先へ進んでしまつて見えなくなつていた。この群衆は全く無防備である。うつそうとした林の中で、列の間隔が開いてしまったときを狙つて、どこからか銃口が私の脳天を狙っているのではないか、あるいは、この馬車夫の手引きで草むらから数人の荒くれ男が飛び出してきて私を投げ飛ばし、車は矢のように脇道へ走り去つてしまうのではないか、などいろいろな場面を想像して落ち着かなかつた。

私は馬車夫のご機嫌を取るために、父から預

かつていた軍用たばこ「極光」の一包を「給你」と言つて差し出した。彼は「謝々」と礼を言い受け取つた。これを機会に会話も少しずつ増え、笑顔も見せるようになった。

右手に玉の浦の海水浴場を、左手に龍源の水源地と古戦場の山々を見ながら進んだ。初秋の空に鞭の音が響き、アカシヤの並木は相変わらず続く。

昼食をとつていた父たちの車を見付けて一緒になり、父から当座の住まいが見付かつたことを聞かされ、離ればなれになつたら大連駅で待ち合わせるなど打ち合わせができたので、安心して私たちは昼食をとつた。昼食をとつていたとき、先ほど通つたトンネルの中で馬車が襲われ、命から逃げて来た人がいたということを聞いた。私の心配していたことが的中したので、改めて気を引き締めて午後の行動に入った。

ともすると遅れがちになるので、馬車夫に代わつて私が鞭を預かることになった。私は夢中に

なつて鞭を当てた。鞭を入れるたびに馬は歩を早めたが、すぐに遅くなつてしまった。

やつと大連管内に入ったが街角ごとに詰め所があつて、中国人保安隊員とソ連兵が数人見張つていた。私たちの安全を守るための警備員だと思つていたら、とんでもない、通る人間の持ち物と馬車の荷物を検査しては、なんのかのと難癖を付けては取り上げてしまうのである。ソ連兵が特に欲しがるのは腕時計と万年筆であつた。腕時計と万年筆は国に持ち帰れば良い値で売れ、大いに生活が潤うということであつた。

私は中国人の保安隊員にストープの煙突を引き抜かれてしまった。虎の子の現金は腹に巻き、少しぐらいの検査では見付からないように隠してあつたので取られなかつたが、必要最小限に絞つて持つて来た荷物の中から取り上げられるのは堪らなかつた。こんな理不尽な目に遭つてもどうしようもないのは悲しかつたが、黙つているしかなかつた。

馬車は、坂を上つたり下りたり木立の間を通り抜けたりして目的地大連市内に入ったが、以前隆盛を誇つていた街は見る影もなく寂れ、建物だけが往時の面影を残しているに過ぎなかつた。満州の奥地から逃げ延びてきた人たちが街路に店を出して物売りをしていた。十歳くらいの子供たちが半袖の夏服姿で客を呼ぶ姿が痛々しかつた。

私も頑張らなければならぬ。私の腕も我が家では大切なはずであつた。父を助けて死に物狂いで働いて家族を支える腕にならう。この日の決心が、一年半、大連での生活の支えになつたと思つている。すっかり黄昏た街に鞭が鳴り、私の心には新しい力が湧き上がってくるのを感じた。

四 大連での生活

まず家探しであつた。私たちは一晚E氏宅の間で仮眠し、翌日E氏の世話してくれたアパートの一室に移つた。しかしこの付近には日本人の住宅が少なく、アパートの住人にも日本人が住んでいないので危険と思ひ、父と姉は新しい家探しに

出掛けた。その直後、窓越しにチラッとソ連兵の姿が見えた。私は、まだ積み上げたままになっていた荷物の中に次姉を押し込んだ。すぐに荒々しい靴音が近付き、ドアを叩く音がした。戸をこじ開けられないように、私は必死になつて押さえた。窓から中をのぞくような気配がしたので、私はドアに身を寄せて小さくなつていた。やっと遠のく足音を聞いて冷や汗をぬぐつた。

翌日、父が街の中心部の花園町に新しい家を見付けたので、早速引越に掛かった。隣がロシア人の老夫婦ということが何よりであつた。いざというときにはすぐ来てもらえるようにお願いしたが、折角見付かったこの家もすぐ引き渡すようにという中国の新政府からの通達があり、再び家探しをする羽目になつた。たった一週間の平和であつた。

適当な家が見付からずに、途方に暮れていた長姉に声を掛けてくれたのは、天津のころの友人Kさんだつた。二階のひと間が空いているから、良

かつたら一緒に住みましょうと言つてくれた。大園町という下町にある社宅風の家だつた。私たちは、ここで半年ほど過ごすことになつた。次は職探しであつた。

そろそろ寒い冬を迎えようとしていた。旅順から持つて来た食糧も先が見えてきた。金も乏しくなつてきたので、働ける者は何とかして収入を得ることを考えようということになつた。

父は知人を頼つて訪問販売を始め、次姉はリング園の作業員になつた。私は中国人の粉屋に勤めることにした。全身真っ白になつて粉をひいても、食事を出してくれるだけで、給金はくれなかつた。これでは家族の面倒は見られないと思ひ、粉屋は辞めて漬物屋に勤めることにした。初めはわずかながら手当をくれたが、状況が悪くなつて手当は出なくなり、前の粉屋と同じことになつてしまつた。

十一歳になつた弟が、自分も落花生売りをするといい出したのでやらせてみたが、始めてから二

日後、中国人の子供たちに落花生を並べてあつた台ごとひっくり返され、泣きながら帰つて来た。やはり小さい子には無理だつたことに気が付き、翌日からは留守番役に回した。

生活は日を追つて苦しくなり、毎日三度の食事が難しくなつてきた。このころ私はひどい黄だんに苦しめられ、尿は黄色というより茶褐色で、吐き気と高熱に悩まされた。病院にも行けず、落ち込んで一人で寝ていた。もう駄目かなと思つ一方、こんなことで参つてしまつてはと、堪えに堪えているうちに何とか回復に向かつていったが、体力が極端に衰えたためか、しばらくはまつすぐに歩けなかつた。

自分が病氣になつて気が付いたことであるが、街を歩いている日本人の身なりが悪く、足取りが重くなつていた。特に、北満から逃げて来た人たちが倒れ始めた話をよく耳にした。

私は大連M百貨店支店長の奥さんのお世話で、衣類の委託販売をさせてもらうことになつた。預

かつた衣類を肩に掛け、広場の雑踏の中に入ると、すぐに買い手の中国人やソ連兵が集まつてくる。彼らは勝手に品物をかき回し、気に入つた物を手に取つて値段の交渉をする。すさまじい商いである。お陰でロシア語もかなり覚えだし、それなりの利益も上げたが、やがて売る品物が無くなりこの商売は終わつた。

十二月、一年目の冬を迎え、寒さが一段と厳しくなつたころ、旅順医専の先生が大連の学校の空き教室で授業を始めた。私は、日本へ引き揚げたとき学校に入るのに役立つだろうから是非通いたいと思つたが、事情が許さなかつた。だがときどき様子を見る程度に顔を出して存在を示していた。マイナス一五度という寒さではインキが凍つてしまう。暖房のない教室では、インキばかりでなく、身も凍り付きそうであつた。

髪の毛は伸び放題でぼうぼう、体は垢だらけであつた。入浴などできないのだし、大方の人がそうであつたから、さほど恥ずかしいとは思わな

かったが、伸びた髪の毛は邪魔であった。学校の
一室で安い料金で散髪してくれる人が現れたの
で、刈ってもらってさっぱりした。床に落ちた髪
の毛を見て、その多さにあ然としてしまった。

冬は長かった。こんなに長く感じた冬は初めて
であった。寒さと栄養失調が原因で街の屋台の中
で死んだ人がいたとか、路上で行き倒れた人がい
たとか、こんな話を毎日聞いた。

西公園町通りの山手に火葬場があったが、死体
を抱えた人が列を作って順番を待つ有様であつ
た。順番が来ないうちに夜になってしまうと、
人々はそこへ死体を置いて順番取りをして家へ帰
り、また翌日並ぶのである。中には死体を置いた
まま姿を見せない人がいた。せっぱ詰まった事情
があつて、やむを得ず放置したのであろうが、野
犬が人間の腕をくわえて歩くという地獄絵図を見
た人がいた。夜の間に野犬の餌食になったのであ
らう。土葬しようにも、厚く凍り付いた大地はと
ても人間の力では掘れるものではない。

大連の街にはデマが飛び交った。近く引揚船が
来るといふ話が伝わると、もう要らないからと、
とっておきの品物を売ってしまうが船は来ない。
デマだと分かって悔やむのはほんのひとつときで、
また次のデマに乗せられて品物を放出するという
ことが繰り返された。こうして日本人の生活は急
激に悪化していった。デマの発信地は中国人の商
人であることは容易に察しが付いた。

そのうちに、金が底をついて死ぬしかない
焦った人たちを相手に、密航引揚船を出すという
商人が現れた。私たちも危険は承知でこの話に乗
ろうかと考えたが、金だけ巻き上げられ、命から
がら逃げ帰って来た人がいると聞いてやめた。

九月になって再び家を明け渡すように言われ、
街の中心から大分離れた初音町のNさん宅の一室
に入れてもらった。このころになって、家を追い
出された人には政府が部屋を斡旋してくれるよう
になった。これは日本人を特定の場合に集めてし
まおうという、ドイツがユダヤ人を特定地区に集

めた、ゲットー方式と同じであることは明らかであった。数日後、元の家の前を通つたら、家の中から中国人の子供が出てくるのを見た。

Nさんの奥さんは突然、生活レベルの低い七人と同居することになった煩わしさに堪えられなかつたのであろう、私たちに対して着ている物が汚いとか食べるものが臭いとか言うので、つい争いになってしまふことがあつた。

私は友人のY君と路上で落花生の販売を始めた。朝の仕入れは市場に近いY君に頼み、私は直接売り場に行った。この商売はY君の父親が、經理その他の面で協力してくれたこともあつて成績が上がり、家計の助けになつた。

食生活は相変わらず塩味を付けた玉蜀黍粉トウモロコシのおかゆばかりであつたので、体力は少しずつ衰えていたのであろう、朝起きるのが堪らなく苦痛になつてきた。

物価は日に日に値上がりし、女性の上等の和服一枚を売つても、米一斤(約六百グラム)がやつ

とであつた。ソ連の軍票は、乱発がたたつて価値が下がってしまった。

髪の毛やひげをもじやもじやに伸ばし、ぼろぼろの服を着て垢だらけにした日本人が、道行くロシア人や、商店の入り口に立つて店の人に物乞いをする姿を目にすることが多くなつた。明らかに生きる氣力を失つた人たちであつた。

こんな街角にも、ソ連兵のコーラスがよく聴かれた。十人くらいも集まるとすぐコーラスが始まる。一人のリーダーが高音部と低音部の初音を示してタクトを振ると、すぐ迫力ある調和のとれた歌声が流れ出す。あごを引き、目をつり上げ、太いのどから発する音はきれいに回りへ広がっていく。私も覚えたばかりの「カチューシャ」や「チョムノヤーチ」「カリンカ」などを兵隊たちの輪の中に入って歌っていると、いつの間にかソ連兵の大きな手が私の肩に乗つていた。

早く、早く、一日も早く引揚船を待つ切ない日が続いた。

五 引揚げ始まる

昭和二十一（一九四六）年十二月中旬、待ちに待った引揚船の第一便が大連港に着いた。私は、この仕事の補助員募集に応じて埠頭に行った。埠頭では、昨日まで生きる気力を失っていた人たちが、希望に顔を輝かせながら集まって来るのを迎ええた。

乗船前に入浴してもらい、その間に着衣を消毒するのである。脱がれた着衣はベルトや紐で縛ってポイラーで蒸気消毒をする。蒸気消毒は簡単に済んでしまい、入浴が終わった人たちは湿ったままの衣服を着用して乗船した。私たち補助員は歩行困難な人に肩を貸したり、背負ったりして乗船させた。私たちがもらう手当はわずかだったが、私たちにも乗船の順番が回ってくると思うと、空きっ腹を抱えながらせせと世話に励んだ。

私の家に引揚げの通知が届いたのは、翌昭和二十二年の一月末であった。一家そろって日本に帰れそうだ。その夜、昭和十年に旅立った郷里のこ

とをあれこれ思い出し、涙を止めることができなかつた。

振り返ってみると、待ちに待った引揚げの知らせを受けたのは、ほんの一週間ほど前のことであつた。売り残していた寝具を手放して、粗穀が混じつた黒パンを買つた。

十二歳のやせ細つた弟が、急いで作つた小さなリュックサックを背負うために身をひねつた途端、逆に振り回されてよろけた。隣に立っていた次姉がとつさに抱きとめたが、姉は弟を抱きとめながら泣いていた。それほど弟は弱つていた。数カ月も引揚げが遅くなつていたら、弟はひよつとすると、と恐ろしい想像をしてしまつた。

灰色の空からは、ひっきりなしに小雪がちらついて視界を遮っていたが、アカシヤの林の黒くどがつた梢が重なり合いながら向こうの空に溶け込んでいく。いつも気が付かなかつた景色が、今日はいく見えるのが不思議であつた。「さようなら」と一人つぶやいてみた。

六 引揚船「弥彦丸」

昭和二十二年一月の大連港は、一面に氷が張りつめていた。私たちの乗った引揚船「弥彦丸」が岸壁を離れ、船の舳先で三角形に割られた氷が、きしみ合いながら後ろへ流れていった。甲板に急造された手すり用のロープにつかまった老婆が、つかまったロープを揺さぶりながら何とも言えない声を出して泣いていた。住み慣れた大連の街を離れる悲しみであろうか、ロープにつかまっているやせ細った垢だらけの手に血の気はなく、一層痛々しかった。

私はこの地への惜別の思いは無い。ソ連兵の襲撃と、中国人の暴漢に脅かされ、立ち退きを命じられては別の土地に移り、その日その日の食糧を求めてうごめいていた。飢えと寒さの中で、何の希望も持てないですさみきった毎日を過ごしていたが、今この地を離れ日本に帰ろうとしていた。一刻も早く郷里に帰りたい思っただけが高ぶっていた。

船内でいただいた初めての食事は、一杯のおかゆとめざし一匹であった。米粒を口にするのは何カ月ぶりであろう。一粒一粒をいとおしむように噛みしめ、めざしを前歯で少しづつかじって味わったとき、よくまあ生き延びたという気持ちだが、実感となつて湧いてきた。

私たちが乗った引揚船は、元は貨物船であった。広い船倉に、何百人もの人がひしめいていた。縦に張り渡されたロープは、海が荒れたときにつかまる手すりであり、間仕切りをも兼ねていた。とはいうものの、現実には海が荒れてくるとロープにしがみつくのだが、臨時に張ったものでは支えにならず、人々は傾いた低い方へ滑って行き、あちこちで悲鳴が上がった。揺り返しがきては、反対側の低い所でまた悲鳴が上がった。

病人もかなりいた。「お願いします」と何度も同班の人に頼んでは、便所に運んでもらっている病人がいた。若い男性だと人づてに聞いた。初めのうちは、身寄りのないこの病人をみんな気の毒

に思つて手伝つていたが、回数が増えるにつれて、「お願いします」という声が聞こえてもだれも横を向くようになってきた。

無理もないことであつた。みんな栄養失調で体力は極端に衰えている。やせた病人とはいへ、二十数段の階段を抱えて上り下りするのは容易ではなかつた。まして夜中ともなればなおさらであつた。「お願いしまゝ」と叫ぶ声が次第に弱くなつていった。助けてあげなければと思うのだが、体がいうことをきかない。黙つて寝ているのが苦しい。

ある朝、雨がしとしと降つていた。船首の方から経を読む声が聞こえてきた。見ると数人の人が集まり、中央に白い布で覆われた遺体が戸板の上に安置されていた。例の病人が亡くなつたとすぐに分かつた。お経が風に乗つてときに大きく、ときに小さく聞こえてくる。必死で生きようとしてきた若者が、祖国を目前に力尽きてしまったのである。読経が終わつて戸板の片方が持ち上げら

れ、白い布にくるまれた遺体は灰青色の海に吞まれていった。船は汽笛を鳴らしながら大きく一周し、やがて日本への進路に戻つた。水葬の終わった甲板を、氷雨がひとしきり激しく叩いていた。

後部船倉で不穏な空気が漂つていた。元憲兵が引揚者の中に紛れ込んでいて、周りの者からリンチを受けたという。きつと、昔この憲兵から制裁を受けたことがあつて、報復をしたのではないか。船長が仲裁に入り、問題はひとまず収まつた。

相変わらず風が強く、海は波が高い。波頭が風に吹き飛ばされて飛沫が降りかかつてくる。左舷が海へつかりそうに傾くと、右舷は中空を指している。にわか作りの便所は甲板から海に突き出すように作られている。こんな荒れた日にはとても使えないが、穏やかな日でもそこから下をのぞくと荒波が牙をむいている。用を足すにもよほどの勇気がないといけないのである。玄界灘は荒れるというから、もう日本が近づいているのである

う。

今朝は明るいニュースを聞いた。船内で赤ん坊が生まれたというのである。「船長室で男児出生、母子共に健康」とだれやら話していた。船に乗ったときからお腹の大きいご夫人とすれ違うたびに、こんな引揚船の中での出産は、どんなに気苦労の多いことだろうと気遣っていたが、無事出産との朗報で、そんな気苦労はすつ飛んでしまった。

夕方、船長から赤ちゃんに「ひでひこ栄彦」という名前が付けられた。将来の栄光を願い、誕生した「弥彦丸」にちなんで命名したと聞いた。良い名である。

翌日の昼下がり、「陸地が見えたぞ」と叫ぶ声を聞いて急いで階段を駆け上がった。人々が指さす方を見た。最初気が付かなかったが、よく見ているうちに、水平線に糸を引いたような陸地らしい物が見えてきた。船に乗って今日で何日目になるのだろうか。今まで早く故郷に帰りたいたいと思

続けてきたが、現実になってみると心の奥底ではこのまま帰ってはならないと思う気持ちが湧いてきた。

昭和十年四月、故郷を出発したとき、両親と兄弟五人の七人であった。今日、故郷に向かっているのも七人であるが、現地で生まれた姪が加わったの七人である。母が亡くなったからである。昭和十九年、現地で亡くなった母のお骨は、その年の暮れに父が郷里の墓地に納めているのだから、現実には母は郷里で待つていてくれるはずであるが、私にはどうしても現地に置き去りにしてきたような気がしてならなかった。

十二年前、郷里を出立する日の朝、母は見送ってくれる村人たちに手を振りながら、別れを惜しんで泣いていた。また、神戸港出港で船が徐々になら離れ、とうとう別れのテープが切れてしまったときも、一人泣きながら甲板にへたり込んでいた母であった。旅順に着いてからも、よく故郷の話を開かされた。「一度帰りたい」としきりに

言っていたが、願いが叶うことはなかった。

心臓を患っていた母には、敗戦後の大連での生活はどうい堪えられるものではなかっただろうし、敗戦の直前に亡くなったことは、本人にとつてはむしろ幸せであつたと思うが、今こうして故国の山々を遙かに望んでみると、母が隣にいてくれたらと思わずにはいられない。

ああ、母を満州に置いてきた。何もかも置き去りにして私たちだけが帰って行く後ろめたい気持ち、さみしさをひしひしと味わっている。

久しぶりに青空が広がり水平線に浮かぶ緑濃い大地は、紛れもなく私たちが上陸する故国日本である。九州から西側を回り、あと数時間で佐世保に上陸するだろう。

船腹に当たる波音が、せわしく何かを語りかけてくる。海いっばいのさざ波が、夕日を照り返して眩しい。

吉林で終戦を迎えて

静岡県 仲野 美幸

一 私の生い立ち

私は家庭の事情で、生まれてからずっと愛媛県の今治市外で、父方の祖父母によつて育てられました。それは、まだ頑是無いころに生母と死別したからです。実の母親の顔も知らないままに育てていきましたが、祖父母の寵愛を一身に受けて、何の不自由も不安も無く毎日を楽しく平和に過ごして、昭和十四（一九三九）年三月に市内にあった今治高等女学校を卒業しました。そして卒業を待つていた如くに、当時旅順に在住していた両親から、こちらに来るようにと言われて、いや応無しに呼び寄せられて、旅順に旅立ちました。

そのころは、父親代わりとなって温かい慈愛を受けていた祖父は亡くなっていて、祖母一人でし